第 8 章

『埋　　火』

(*Sleeping Fires,* 1895)

George Gissing
Illustrated London News (May 1, 1897)

作品の梗概

エドマンド・ラングリー (Edmund Langley) は，42歳の冬をギリシャの古都アテネで漫然と過ごしていた。貴族であった友人の遺産を譲り受けていたので，金銭的な心配はなかった。古代遺跡を見たり，古典文学を読むなどして，悠々自適の生活を送っていた。ある日，アテネの街中で偶然，ケンブリッジ大学時代の友人ウォーボイズ (Worboys) と出合う。学問の道に進んだウォーボイズは特別研究員となっており，アテネにはルイス・リード (Louis Reed) という18歳の若者の大陸旅行に同伴して来ていたのだった。ウォーボイズに紹介されて，ラングリーはルイスと知り合う。シェリーのような情熱的理想主義者であるルイスは，ラングリーの人生観にも少しずつ影響を与えるようになる。

ところで，ルイスには両親がいない。孤児となったルイスの後見人として彼を育ててくれたのはレヴィル令夫人 (Lady Revill) だという。彼女はルイスを本当の息子のように愛情深く育て，十分な教育を受けさせ，大学にも行かせたいと考えていた。しかし，ルイス自身は役に立たない勉強をいつまでも続けるよりも，早く社会に出たいと夫人に反発していた。ルイスは社会運動家としても知られているトレシリアン夫人 (Mrs Tresilian) という年上の女性と親しくなり，彼女の進歩的な考え方にすっかり感化されてしまったのである。そこでレヴィル令夫人は，彼の気持ちが鎮まることを願って，学者ウォーボイズと共に1年間外国旅行に出させたのであった。

こうしてウォーボイズとルイスと共に，アテネでの日々を過ごすようになったことが，イギリスを避け，異国の地で人生を浪費していたラングリーの心に，長いこと封印されていた16年前のある記憶を呼び覚ました。実はラングリーは，レヴィル令夫人となる前のアグネス・フォレスト (Agnes Forrest) とは相思相愛で，結婚を申し込んだことがあったのである。しかし，若い頃に知り合った下層階級の女性との間に息子がいると正直に告白したことで，結婚話が立ち消えになってしまったのだった。子供の母親は間もなく他の男と駆け落ちし，子供も連れて南アフリカに行ってしまってからは音沙汰がな

くなっていた。しかし，アグネスの父親は結婚を許してくれず，アグネス自身からも結婚はできないという手紙が来たのだった。アグネスは間もなく年配の下院議員と結婚し，レヴィル令夫人となってしまったのであった。

また，ルイスを見ていると，ラングリーは息子に対する思いで胸が締め付けられるようだった。ラングリーの息子も，生きているとしたら丁度ルイスと同じ年頃のはずなのだ。息子と一緒だったらどんなにか楽しい人生だろう，と考えずにはいられなかったのだ。

ルイスは旅先からもトレシリアン夫人に毎日手紙を書いていたが，ある日，そのトレシリアン夫人から，もう文通もできないし，イギリスに帰国してからも会うことは出来ないという返事をもらい動転する。その手紙によると，ある男性が，トレシリアン夫人とルイスの関係をレヴィル令夫人が快く思っていないことを知らせに来たのだという。手紙を読んで居ても立ってもいられなくなったルイスは，すぐに帰国すると言い出す。しかし，ラングリーに説得されてギリシャに留まることにし，代わりにラングリーがイギリスに戻って，レヴィル令夫人やトレシリアン夫人と話をすることになる。

ロンドンに到着し，ラングリーは16年ぶりにアグネス・レヴィルと対面する。昔と変わらぬ美しい容姿ではあったが，富と特権を有する未亡人として因襲に厳格になり，冷淡になってしまったような印象をラングリーは受ける。しかし，彼女が昔のままの意志の強さと豊かな感情を無理に押し殺していることをラングリーは感じ取るのである。ラングリーはルイスが受け取ったトレシリアン夫人からの手紙についてアグネスに話し，それには彼女は全く関与していないことを確認する。それからラングリーは，今後も自分がルイスと付き合うことを許して欲しい，それが自分の人生に1つの目的を与えてくれるだろうから，と頼む。アグネスはラングリーとの付き合いを歓迎すると述べ，さらにルイスについて伝えたいことがあるので，近々手紙を書くというのだった。

数日後その手紙がアグネスから届く。そこには彼女がルイスを育てることになった経緯が記されてあった。ルイスの母親は男と駆け落ちして南アフリカに行ったものの，その男に棄てられて，母子はロンドンに帰って来たのだという。間もなく母親は体を壊して亡くなってしまったので，彼女の昔からの友人だったリード夫妻 (Mr & Mrs Reed) が，その子供を引き取って育てていた。そのリード夫妻と親しくしていたアグネスはある日，リード氏から，ルイスの父親はラングリーという名前の男だと分かったと聞く。それを知ったアグネスは，リード夫人の死後，ルイスを引き取って育てることにしたと

いうのだ。

ラングリーは，ルイスが自分の息子だと知ると大変な喜びようだった。しかし，この喜びは束の間のものとなってしまう。間もなく，ルイスがギリシャで病気になり，そのまま亡くなってしまったという電報が届くのである。気も狂わんほどの悲しみに打ちひしがれたラングリーは，アグネスを激しく非難してしまう。ラングリーが結婚を申し込んだときに，子供がいると告白しただけで，彼の話も聞かずに結婚はできないと決めてしまったことや，ラングリーが父親と分かっても彼に知らせなかったことなどを厳しく糾弾したのである。しかし，すぐにラングリーはこのことを後悔し，アグネスが滞在しているサマセット州の別荘にまで彼女に会いに行く。アグネスはトレシリアン夫人とは実際にはどのような人なのかと興味を示し，ラングリーに尋ねる。またルイスとの文通をやめさせたのは誰かなどと尋ね，それがヘンリー卿であったことを知る。夫人はヘンリー卿 (Lord Henry Strands) と近々結婚すると噂されていたのだが，彼女にはそのつもりはないという。

一度ロンドンに帰るが，1週間後に再びラングリーはサマセット州に赴く。ギリシャで若さと希望にあふれたルイスと親しくなるうちに，ラングリーはまだ自分にも若さと情熱が残っていると気づいたのである。アグネスにもう一度会って愛を告白し，失われた時間を取り戻すこと，それがラングリーがイギリスに戻ったもう1つの目的だったのだ。彼は自分の過去の過ちを悔いる一方で，アグネスも彼を愛していながらレヴィル氏と結婚したことは罪であると言う。そして今度は自分を偽らずに，素直にラングリーの愛に応えて欲しい，と再び結婚を申し込むのだ。アグネスは結婚はできないと頑なに答えるのだが，彼に対する愛情は否定できない。ラングリーは1ヶ月後にもう一度会いに来ると約束をする。

その1ヶ月の間にアグネスは変化を見せ始める。それまでは偏見を持っていたトレシリアン夫人に，夫人が関わっている慈善事業に役立てて欲しいと寄付を申し出たのである。ラングリーは彼女が結婚に対しても考えが変わったのではないかと期待する。しかし，アグネスの邸宅を訪れてみると，彼女は丁度ロンドンの家を引き払ってサマセット州に移り住む準備をしているところだった。彼女は自分の人生の愚かな行ないや罪を反省しているのだという。それで田舎に隠棲し，償いに人生を捧げることに決めたというのである。しかし，彼女の目にはラングリーへの愛情が表われていた。彼はそのような苦行こそ愚かな罪であると言う。彼女の心を解放し，ラングリーの愛を受け入れることで彼女は完全な女性になれるのだと説くのだ。

ルイスの埋葬のためにギリシャに戻って滞在していたラングリーのもとに，アグネスから手紙が届く。とうとうラングリーと結婚する決意が固まったのだ。そして，彼は残りの人生をアグネスと共に楽しむために，イギリスに帰ることにする。

"*Carpe Diem!*"——『埋火』の選択

第1節　『埋火』という作品について

『埋火』は，1895年12月にフィッシャー・アンウィン (Fisher Unwin) の「実名作品シリーズ」の中の1冊として出版された。それまでのギッシングの作品は三巻本の体裁で出版されていたが，『埋火』は一巻本である。1895年以降，貸本屋が出版社に支払う金額を減らしたために，一般読者が貸本屋から借りずに自分で買うことの出来る一巻本を，出版社が作家に要求するようになったのだが，ギッシングもこうした時代の変化の影響を受けていたのである。[1]

ギッシング自身が「大きなキャンバス」に描ける長篇小説の方を好んだため，従来のギッシング研究では主に長篇作品が対象とされて，中篇・短篇作品はあまり重要視されていなかった。『埋火』についても，ギッシングが「取るに足らない，ちっぽけな作品」だと述べているので (1895年12月18日付のエドゥアルト・ベルツ宛ての手紙，*Letters* 6: 70)，この作品の不当な評価が定着してしまい，長篇作品と同等に扱われることはなかった。しかし，ギッシングの言葉は彼によくある謙遜と受けとめるべきである。なぜなら，ギッシングはもう一方で『埋火』は「長いこと書きたいと思って温めていた物語」であると述べているし，[2] また同時に出版された『下宿人』よりも「はるかに価値のある作品だ」(1896年1月15日付のモーリー・ロバーツ宛ての手紙，*Letters* 6: 83) と考えていたのだ。それに加えて『埋火』は，長年の念願が叶って，1889年11月11日から約3ヶ月間旅をした，ギリシャの印象をもとに書かれた唯一の小説であることも忘れてはならない。金儲けのためだけの作品に，愛するギリシャの思い出を使ってしまうとは考えられない。

『埋火』が，研究されるべき優れた小作品であるという根拠は他にもある。まず，長篇にありがちな弛みや脱線がないし，登場人物の描写がリアリスティックである。また，ギリシャの風景描写は，単にエキゾチックなだけでなく，テーマにとって欠くべからざる要素となっている。そしてギッシング

自身が「むさくるしくも，あさましくもない」と評している『埋火』の，希望に満ちたハッピーエンディングは特異であり，興味を引く（1895 年 1 月 12 日，フィッシャー・アンウィン宛ての手紙，*Letters* 5: 279）。更に，テーマに注目してみると，ギッシング文学にとって中心的なテーマが複数，重層的に存在していることが分かる。

例えば『埋火』では〈秘密の罪〉がテーマの 1 つとなっている。ギッシング自身も，マンチェスターでの学生時代の不名誉な過去をひた隠しに隠し，罪の意識を抱えながら生きていた。そのため〈秘密の罪〉のテーマは彼の作品にとって重要なものとなっており，特に『流謫の地に生まれて』で大々的に取り上げられている。また〈父親の罪〉や〈父性〉というテーマも見られるが，これは 1877 年『シカゴ・トリビューン』紙に載ったギッシングの初期の短篇「父の罪」や，『埋火』の次に書かれた『渦』などと共通するテーマである。それから，〈長い月日を経て実る恋〉というテーマであれば，やがて『生命の冠』の中心的テーマとなるものだ。このように『埋火』には複数の重要なテーマが取り扱われているのだが，その中で最も注目すべき重要なテーマは，〈過去か現在か〉という問題である。この章では，このテーマに注目し，『埋火』が「取るに足らない」どころか，ギッシング文学の真髄が凝縮された，実に興味深い作品であることを示したいと考えている。

第 2 節　過去か現在か

ギッシングはヴィクトリア朝後期のイギリス社会をリアリスティックに描く小説を書く一方で，古典の教養を身につけることに生涯情熱を燃やし続けたことでも知られている。オーエンズ・カレッジ在学中は，いつも古典科目で優秀な成績を収めており，将来は古典学者になるものと思われていた。大学を退学になった後も，ロンドンの貧民街で生活しながら古典学習を独学で続けていたことが，家族に宛てた手紙などから明らかである。そして，十分な原稿料が入った時にまず最初に訪れたのは，古典文学の故郷，イタリアであった。その後も現代社会の様々な問題を取り上げる小説を書きながら，古典の世界に憧れを抱き続け，1889 年にはギリシャ旅行の夢も果たしている。

小説執筆と古典学習を同時に続けていたギッシングは，彼自身が述べているように常に「古代世界と現代世界」“the ancient & the modern world”（1895 年 8 月 27 日，ベルツ宛ての手紙，*Letters* 6: 18）の両方に関心を持っていたのだ。自分自身のこの特徴を自覚していたギッシングは，ベネチアの労働者

階級についての小説が書けたらこの2つの関心を同時に満たすことができるのに，とイタリアからベルツに宛てた手紙で書いている。

> Indeed my one thought here, these last few days, has been: If only I knew enough of the Venetian working classes to write a story about one of those magnificent girls with the long shawls & the high coil of dark hair!—You see, it must either be Greece & Rome,—or modern industrialism. How do you explain this? Surely it is a strange characteristic? (13 February 1889, *Letters* 4: 45)

古代と現代という，時を大きく隔てた2つの世界に対する分裂した関心——これが小説家ギッシングの本質を作り上げていたといえるだろう。

晩年のギッシングの親しい友人であったH・G・ウェルズは，ギッシングの古典好きを全く理解しなかった。それどころか，ギッシングが現代的感覚を持てず，ベストセラーとなる小説が書けなかったのは，彼の古典教育が妨げとなったためだと考えていた。[3] しかしそうではなくて，ギッシングの場合は，この二分した関心のお陰で，時間や空間を超越した客観性をもって物事を見ることができたのではあるまいか。自分自身も貧民街で貧しい生活をしていながらも，〈どん底〉に引きずり込まれることなく，客観的にそこに暮らす人々を観察し，芸術性が高く力強い小説を超然とした視点から書くことができたのも，このような分裂性のためではないだろうか。晩年の旅行記『イオニア海のほとり』には，彼にとって古典の世界がどのようなものだったのかを述べている箇所がある。

> Every man has his intellectual desire; mine is to escape life as I know it and dream myself into that old world which was the imaginative delight of my boyhood.[4]

少年時代から憧れていた古典の世界，遠い過去の世界に思いを馳せることによって，ギッシングは現実から逃避することができた。そして，この非現実の世界を自分の中に築いていたからこそ，悲惨な現実に果敢に向かい，写実的な作品を書くことができたのではないだろうか。

また，〈過去と現在〉という2つの世界に分裂した関心を抱いていたギッシングは，過去か現在か，どちらかを選ぶべきではないかと考えることがしばしばあった。そのため〈過去〉に生きるべきか，〈現在〉に生きるべきか，という問題は，彼の小説にとっても大きなテーマとなっているのである。特に1890年代の作品では登場人物を〈過去〉志向と〈現在〉志向に分けて，この

問題を提示することが多いのだが，ギッシングの出す答えは一様ではない。作品ごとにギッシングの姿勢の揺らぎが見え，〈過去か現在か〉というのは，彼にとって容易にどちらかを選べる問題ではなかったことが窺えるのだ。

例えば，『流謫の地に生まれて』では，主人公ゴドウィン・ピーク (Godwin Peak) は最終的に「過去と訣別する」(394) 決意をする。[5] しかし，彼はそれによって時間的にも空間的にも何処にも属せなくなってしまう。異国の地で放浪の身のまま彼が死去したと知らされた友人のエリカ (Earwaker) が言うように，ゴドウィンは「死ぬときまでもエグザイルだった」(416) のである。『女王即位 50 年祭の年に』に登場するライオネル・タラント (Lionel Tarrant) は，「今日に対しては批判的で，明日については不安に思い，目は過去に向いていた」(122) と描かれている。[6] 一方，彼の妻となったナンシー・ロード (Nancy Lord) は，未来にも過去にも関心がなく，ただひたすら「現在を生きたいと思っていた」(83)。しかし，彼女はライオネルの子供を身ごもり，彼の妻となると，自分の〈現在〉を生きるよりも，夫と子供に人生を捧げて生きるようになるのだ。また，『渦』においては，歴史書を読むことを好み，現代社会との関わりを避けていた主人公ハーヴェイ・ロルフ (Harvey Rolph) は，息子ヒューイ (Hughie) の誕生を機に父親としての責任に目覚め，「人は自分の時代に属すべきだ」(143) と考えるようになる。[7] そしてそれまでは目を背けていた新聞も読むようになり，株式投資も始めて，〈現在〉と積極的に関わるようになるのだった。しかし〈現在〉の渦に巻きこまれてしまってからは，〈過去〉に対する彼の見方も変わってしまう。彼が好んでいた歴史書にしても，今の新聞に書かれているような「ことばにできない苦悩の毒々しい記録」(304) に過ぎないのではないかと思い，楽しめなくなってしまうのだ。ハーヴェイは，〈現在〉に対しても，〈過去〉に対しても，嫌悪を覚えるようになってしまい，「もう間もなくすれば，彼も，彼の愛する人々も地球上から消えてしまう」(356) と考えることだけが唯一の慰めとなってしまうのだ。また，『命の冠』に至っては，「今日の世界に生きているもの」(11) に興味を持つのはアーノルド・ジャックス (Arnold Jacks) のような帝国主義者だけであり，平和主義者で真実の愛の成就のみを望むピアズ・オトウェイ (Piers Otway) には「今を生きることはできなかった」(293–94)。[8] ピアズは過去にも現在にも生きたいとは考えておらず，ただ将来愛する人と結ばれる日がくるかもしれないと夢見ているのだ。

このように見てくると，イギリスが次第に好戦的な帝国主義国家となっていった 1890 年代後半になると，〈今を生きる〉主人公は描かれなくなってい

る。人間性を奪う戦争や暴力を嫌い，反帝国主義者だったギッシングにとって，〈現在〉は魅力のない世界になってしまったのであろう。実際，晩年は『イオニア海のほとり』や『ヘンリー・ライクロフトの私記』などのような作品を書くようになり，〈現在〉を見据えた小説を書くことからは離れるようになっていた。亡くなる直前まで執筆していた未完の小説『ヴェラニルダ』が，現代のイギリスではなく，6世紀のローマを題材にしていることにも，ギッシングの現在からの逃避願望が表われているといえるであろう。

〈過去か，現在か〉というテーマに注目すると，ここでも『埋火』が特異な作品であることが分かる。というのも，『埋火』が現世謳歌の作品だからである。この作品は前半はギリシャのアテネ，後半はイギリスを舞台にしている。それゆえに，古典の世界か現代のイギリスか，過去か現在か，という問題はより切実なものとなっているのである。そして，ギッシングは明らかに主人公に〈現在〉を選ばせており，さらにそれがハッピーエンディングとなっているのだ。このことに注目して，次節において『埋火』を詳しく考察してみよう。

第3節　ギリシャからイギリスへ

『埋火』の主人公のラングリーは，現代のイギリスとは無縁の古都アテネで隠遁生活を送っている。彼は読書ばかりの生活のために背中が丸くなっており (10)，部屋には何冊も本が積まれている (8) と描写されている。[9] 物語が幕を開けたこの日も，古代ギリシャの喜劇作家アリストパネスを読んでいるところだった。

> The rain was over. As he sat reading Langley saw the page illumined with a flood of sunshine, which warmed his face and hand. For a few minutes he read on, then closed his Aristophanes with a laugh—faint echo of the laughter of more than two thousand years ago. (7)

ラングリーは現代の世界ではなく，2000年以上も昔の古典の世界に目を向けながらアテネに滞在していることが分かる。その頃の彼には，現代のアテネなど何の価値もなかった。そこでテオシウス神殿の遺跡は近代建築の代表のような鉄道駅と対比され，次のように描写されている。

> So nearly perfect that it can scarce be called a ruin, there, on the ragged fringe of modern Athens, hard by the station of the Piraeus Railway, its marble majesty consecrates the ravaged soil. A sanctuary still, so old, so wondrous in its isolation, that all the life of to-day around it seems a futility and an impertinence. (11)

このように，〈現代〉の軽薄さに対して，〈過去〉の素晴らしさが称えられているのだ。

ラングリーは26歳の時に相思相愛だったアグネスに求婚する際に，下層階級の女性との間に産まれた子供がいることを告白したために，彼女と結婚出来なくなってしまい，それ以来人生に失望するようになっていた。〈現在〉を生きることに消極的になっていたのだが，現代世界への未練がまるでなくなっていたわけではないことは，アリストパネスの本を閉じたラングリーの次のような描写で分かる。

> With the laugh he had forgotten Aristophanes, and now, as his features told, was possessed with thought of some modern, some personal interest, a care, it seemed, and perchance that one, woven into the fabric of his life, which accounted for deep lines on a face otherwise expressing the contentment of manhood in its prime. (9)

ラングリーは，古典を読み，古代遺跡を見ながら，はるか昔のギリシャに目を向けて暮らしていたのだが，〈現代〉の何かに心を引かれてもいたのである。

ラングリーの生活は，ケンブリッジ大学時代の友人ウォーボイズと，彼が旅のお供をしている若者ルイス・リードに，偶然アテネで出合ったことで変化し始める。ウォーボイズとルイスの興味も，それぞれ〈過去〉と〈現在〉とに明確に分けられている。ウォーボイズは古典研究者で，「過去に生きている」"living in the past" (230)。一方，ルイスは「過去では人は生きていけない」"They can't feed on the past" (67) という考えの「非常に現代的な男」"terribly modern man" (24) である。ウォーボイズとラングリーが再会した場所は古代墓地の遺跡ケラミコス (Kerameikos) であったが，その日ルイスが見学しに行っていたのは古代の墓地ではなく，現代の墓地であったとされていることにも，〈過去〉と〈現在〉を対比させようというギッシングの意図が感じられる。遺跡にも古典にも興味を持っていないルイスは，古代ギリシャよりも現代のギリシャに，すなわち〈過去〉より〈現在〉に関心を持っているのだ。ルイスはラングリーに次のように述べる。

"[W]hat can we get to know of the life of the country? That's what I care about, Mr Langley. I want to see how the people live nowadays. It matters very little what they did ages ago. It seems to me that life isn't long enough to live in the past as well as in the present." (26)

「過去と現在の両方に生きるほど人生は長くないよ」というルイスの言葉にラングリーは愕然とする。かつては社交家で活動的だったラングリーは，本質的には〈現在〉に生きることを好んでいた。〈過去〉の世界に身を埋め，〈現在〉から目を逸らして人生を浪費していたラングリーだが，若さと活力に溢れ，今を生きているルイスに影響されて，次第に「今を生きたい」と思うようになるのである。

ラングリーの変化は，ギリシャの風景を見て感じることの違いにも現われる。ホテル部屋の窓からアテネの風景を見ながら，ラングリーは古代ギリシャ人と自分を比べて，自分も今からでも人生を精一杯生きよう，と考えるようになる。

"They lived their life, enjoyed to the uttermost the golden day that was granted them. And I, whose day is passing, can only try to forget myself in the tale of their vanished glory. Is it too late? Are the hopes and energies of life for ever withdrawn?" (55–56)

もう一度〈今〉と向き合う決意をしたラングリーは，古代世界は現代の現実から逃避するところではなく，人生をより有意義に生きるための理想を与えてくれるものなのだと悟るようになる。そして，古典の教養は何の役にも立たないのではないかというルイスに，ラングリーは次のように答えることができるのだ。

"You'll see it in a different light some day," said Langley. "The world never had such need of the Greeks as in our time. Vigour, sanity, and joy—that's their gospel."

"And of what earthly use," cried the other, "to all but a fraction of mankind?"

"Why, as the ideal, my dear fellow. And lots of us, who might make it a reality, mourn through life. I am thinking of myself." (75–76)

ルイスに会うまでのラングリーは，古典を読み，古代遺跡を見てはいても，過去の世界に逃避するばかりで，古代ギリシャ人の大切にしていた「活力，健

康，喜び」の重要さは気にも留めていなかった。しかし，今では古代ギリシャ人から学んだこれらのことを，自分の人生を生きる上での理想とするべきだと気づいたのである。

「活力，健康，喜び」の理想を実践し，「今を生きる」ためにラングリーはイギリスに戻る決意をする。ルイスに代わってアグネスに話をするためでもあったが，自分のためにも彼女にもう一度会わなくてはならないと思ったのである。こうして一歩前に踏み出したラングリーにとって，古典世界はもはや必要がなくなっていた。このことはイギリスに渡る船からコルフ (Corfu) を見て，その古代名がコルキュラ (Corcyra) であることを思い出し，微笑む場面にも表われている。

> On awaking he found himself within sight of Corfu－Corcyra, as he remembered with a smile, thinking of Worboys. But it was the modern world; he could now give little thought to Homer or to Thucydides. In his last glimpse of Parnassus he had bidden farewell to the old dreams. (100)

ホメロスやツキジデスの世界ではなく，現在の世界に目を向けて行こうと思って，ギリシャを離れたラングリーは，「古代の夢に別れを告げた」のであった。

イギリスでラングリーはアグネスと会い，再び彼女に求婚する。人生を悔いなく生きるためには，彼女が必要だったのである。アテネに戻って彼女の返事を待っているときのラングリーは，物語の最初のころとは別人のようになっている。もはや古典の中に逃避することもなく，今の人生と向き合って生きているのだ。彼の周りには古い本は積み重ねられていないし，彼の外見にも若々しさと力強さが加わっている。

> On an October afternoon Langley sat in his old room at Athens, writing. But no books were piled about him, and his countenance had undergone a change since the day when he bent in idle enjoyment over the page of Aristophanes. It was graver, yet not so old; smoother, but more virile. (223)

そして，アグネスからプロポーズを受けるという返事をもらい，ギリシャでの生活を終えてイギリスに戻る決意をしたラングリーからは，すっかり〈過去〉の魔法は解けているのである。小説の最後は次のようになっている。

> I, whose life is now to begin, must shake off this sorcery of Athens, and remember it only as a delightful dream. Mere fairyland; and our Louis has become part of it—to be remembered by me as calmly, yet as tenderly, as this last sunset. (229–30)

こうしてラングリーは魔法の国，おとぎの国である古典世界を発ち，〈現在〉の世界に生きることを選択するのである。そしてそれは真実の愛に支えられた，素晴らしい世界なのである。『埋火』でギッシングは〈過去か現在か〉の問いに対して明らかに〈現在〉という答えを出しているのだ。

第4節　オマーリアンのギッシング

ペシミスティックな作品が多いギッシングの作品の中で，『埋火』ほど明快な現世謳歌の作品は他にない。そこで疑問なのは，なぜこのような作品が書かれたのかということである。〈過去〉は〈過去〉として訣別し，〈今〉に立ち向かう決意をする物語を，ギッシングに書かせたものは何であったのか。それは執筆当時のギッシングがオマール・ハイヤーム (Omar Khayyám, 1048?–?1131) の詩の影響を受けていたからではないかと思われる。

オマール・ハイヤームは11世紀のペルシャの詩人であるが，彼の書いた四行詩「ルバイヤート」"Rubáiyát" をエドワード・フィッツジェラルド (Edward FitzGerald, 1809–83) が英訳した『オマール・ハイヤーム四行詩集』(*The Rubáiyát of Omar Khayyám*) は1890年代になってベストセラーとなった。1859年の出版当初はまるで注目されなかったが，数年後，売れ残って1ペニーにまで値下げされていたものが，偶然D・G・ロセッティの目に留まったことで，この作品の運命が激変したのだ。ロセッティが友人たちにオマール・ハイヤームを薦めると，瞬く間にラファエロ前派を中心に人気が広がった。A・C・スウィンバーンは「ルバイヤート」からインスピレーションを得て「ヴィーナス礼賛」(*Laus Veneris*, 1869) という詩を詠んでいるし，ジョン・ラスキンは当時まだ匿名だった訳者に宛て熱烈なファンレターを書いたのであった。[10] 第2版，第3版，第4版，と改訂版が出版されるうちに，読者数はますます膨れ上がった。フィッツジェラルドの死後6年がたつ1889年に，『エドワード・フィッツジェラルドの書簡と作品集』(*Letters and Literary Remains of Edward FitzGerald*) が出版されると，さらに人気に拍車がかかった。ルバイヤートは多くの人に暗唱され，至るところで引用されるようになっていた。1892年にはオマール・ハイヤーム・クラブなるものまでが発足

していた。ルバイヤートの出版年に因んで59名に限定された会員たちは，ボタンホールにオマールがこよなく愛したとされるバラの花を挿して，年4回のクラブディナーに集い，ワインを酌み交わしたという。会員にはJ・M・バリーやH・G・ウェルズをはじめとする人気作家や，一流文芸雑誌の主筆や編集者など，当時の文壇の中心人物が多く含まれていた。[11]

ノーマン・ペイジは，オマール・ハイヤームの「ルバイヤート」を「早産で生まれた世紀末詩だった」[12]と述べているが，まさにその言葉の通りで，この作品は出版から30年以上たった19世紀末になって人気の絶頂を迎えたのだ。これは「ルバイヤート」の世界が世紀末的ムードと丁度合致したためであろう。19世紀の終わりを目前にして，人々はヴィクトリア女王の治世の終焉と，大英帝国の華々しい繁栄の陰りも重ねて意識せざるをえなくなっていた。明るい将来への希望が持てなくなり，暗鬱とした雰囲気が重く立ち込めていた。そのような時代に「ルバイヤート」の現世謳歌主義は1つの心の支えとなったのだ。オマール・ハイヤームは未来のことを憂いたり，過去を嘆くのではなく，今，ここにある現在を楽しもうではないか，と繰り返し詠っているのである。例えば第37連を見てみよう。

> Ah, fill the Cup:—what boots it to repeat
> How time is slipping underneath our feet:
> Unborn To-morrow and dead Yesterday,
> Why fret about them if To-day be sweet!

またフィッツジェラルドは，オマール・ハイヤームが説いている思想を次のようにまとめている。

> [T]he Tentmaker [. . .], after vainly endeavouring to unshackle his Steps from Destiny, and to catch some authentic Glimpse of Tomorrow, fell back upon Today [. . .] as the only Ground he got to stand upon, however momentarily slipping from under his Feet.[13]

最初の書評を書いたチャールズ・エリオット・ノートンが「オマール・ハイヤームの一般的特色は，われわれの世代の時代的特徴と全く一致している」と述べているように，メランコリックな現世謳歌主義はヴィクトリア朝後期の人々の心を摑んだのである。[14]

オマール・ハイヤームは翻訳文学であるためか，従来のヴィクトリア朝英

文学研究においてはほとんど注目されることがなかった。しかし，当時の文壇の多くを虜にした「ルバイヤート」の重要性は，軽視出来ないものなのだ。特にギッシングとオマール・ハイヤーム・カルトとの関わりは大変興味深い問題である。というのも，ギッシング自身，オマール・ハイヤームの愛読者，「オマーリアン」"Omarian" であり，オマール・ハイヤーム・クラブの栄えある会員でもあったからだ。1899年以降フランスで同棲生活をするようになったフランス人女性ガブリエル・フルリには，読むべき英文学作品の1つとして，手紙の中で次のようにオマール・ハイヤームを薦めている。

> [R]egarded as an English poem, FitzGerald's Omar is wonderful. Tennyson spoke of it with the highest admiration, & Swinburne places FitzGerald high among poets. (1902年3月20日の手紙，*Letters* 9: 363)

ギッシングのオマーリアンとしての一面はあまり知られていないが，『埋火』に表われている現世謳歌主義は明らかにオマーリアンとしてのものであろう。実際，『埋火』の書かれた1895年はオマーリアンとしてのギッシングにとって，重要な年だった。というのもこの年の10月に，ギッシングはオマール・ハイヤーム・クラブに入会することができたのである。

ギッシングとオマール・ハイヤーム・カルトを結ぶきっかけとなったのは，親友エドワード・クロッド (Edward Clodd) との交友である。ロンドン共同資本銀行の銀行員だったクロッドとは，1887年6月に知り合った。商業主義を激しく嫌悪していたギッシングは，銀行員という職業に対しても少なからぬ偏見を抱いていたであろうが，クロッドとは生涯続く固い友情を築くこととなる。それは文学，科学のいずれにも通じているクロッドのバランスの取れた知性と，穏やかな人間性のためであろう。このクロッドについて極めて重要なことは，彼のオマール・ハイヤームへの傾倒である。彼はオマール・ハイヤームで詠われている思想を人生の指針としていた。そして，1892年10月13日の発足当初からのオマール・ハイヤーム・クラブの会員だったのである。1894年から1895年には，オマール・ハイヤーム・クラブの会長にもなっており，クロッドはまさしくオマール・ハイヤーム・カルトの中心人物の一人だったのである。

クロッドとの親交を通して，ギッシングはオマール・ハイヤームに魅了されるようになったようである。このころのギッシングの日記には，フィッツジェラルドを何度も読み返していることが記録されているのだ。[15] 更に，1894

年にオマール・ハイヤーム・クラブの会長となったクロッドは，ギッシングを他の会員たちに引き合わせている。1895 年の 6 月には，ギッシングはサフォーク州にあるクロッドの別邸での休暇に招待された。この時，ギッシング以外に招待を受けたクレメント・ショーター，ジョージ・ホエール，グラント・アレン，L・F・オースティンなどはいずれも，オマール・ハイヤーム・クラブの創始者か，初代メンバーであった。オマーリアンの集まりにギッシングも加わっていたのである。そして，この休暇の最終日に，代表して記念の詩を作ったのはギッシングだった。彼が詠んだ詩は，次のようなものであった。

> An eddy in the silent flow
> Of days and years that bear us－whither
> We know not, but 'tis well to know
> We spent this sunny day together. [16]

オマール・ハイヤームと同じ四行詩であり，〈今〉を賛美する内容であるだけでなく，使われている語がオマール・ハイヤームを喚起させるものであることは注目に値するだろう。[17]

この休暇の一ヶ月後の 1895 年 7 月，ギッシングはオマール・ハイヤーム・クラブのディナーにゲストとして招待された。[18] そして，1895 年 10 月には正式な会員としてオマール・ハイヤーム・クラブに迎え入れられたのである。ギッシングはこのクラブの会員であることを非常に誇りにしていたようである。同じく会員であった H・G・ウェルズに，「オマールはあらゆるクラブの中で私が所属する唯一のクラブである」と述べているように，ギッシングが自ら入会したのはオマール・ハイヤーム・クラブだけであった。会員が著名な知識人ばかりでエリートの集まりだったことも魅力であったろうが，何よりもまず，彼がオマール・ハイヤームの愛読者であったことがその理由であったことに間違いはない。そしてオマーリアンとして，現世謳歌主義の作品として書いたのが，『埋火』だったのであろう。

第 5 節　唯一の現世謳歌主義作品

このように見てくると，『埋火』はギッシングの作品の中でも特別な作品であることは明らかである。読者をひきつけるために明るい作風にしたのではなく，ギッシングはオマーリアンとしての信念を表出するために，この現世

謳歌の作品を書いたのだ。第1章「ギッシングの生涯」でジェイコブ・コールグも述べているように，『埋火』の書かれた時期のギッシングの人生は安定したものであった。家庭も落ち着き，友人や仲間にも恵まれていたギッシングは，人生で初めて，「今を生きよう」と考えることが出来たのであろう。実際，1894年11月24日のエドゥアルト・ベルツ宛ての手紙で，ギッシングは次のようなアドバイスを書いている。

> Remember that life slips away so fast, &, in defiance of everything, follow for a brief time the motto of *Carpe Diem*. (*Letters* 5: 257)

「今を生きる」"*Carpe Diem* [Enjoy the Day]" というのが，この頃のギッシングのモットーとなっていたのであり，それは，〈過去か現在か〉の問いに対してオマーリアンとして出した答えであった。そうして，〈過去〉ではなく〈現在〉を生きようと決意する主人公を描いた作品，『埋火』が生まれたのである。

『埋火』以降，利己的で暴力的な帝国主義が強くなるとともに，ギッシングは〈現在〉に否定的な作品を書くようになっていった。このことからも彼が "*Carpe Diem*" という現世謳歌主義を絶対的に受け入れていたわけではないことは確かである。しかし『埋火』を書いた1895年当時のギッシングに限るならば，それは彼にとって大きな支えとなる生き方だったのだ。〈過去〉と〈現在〉に対して分裂した関心を持ち，その間で常に揺れ動いていたギッシングに，オマール・ハイヤームは1つの答えを出してくれたのであろう。『埋火』は，〈過去か現在か〉というギッシングにとって重大な問題を扱っているだけでなく，その問いに対する答えとなる現世謳歌主義に，彼のオマーリアンとしての側面が現われている，貴重な作品なのである。

註

テキストは George Gissing, *Sleeping Fires*, edited and with a new introduction and notes by Pierre Coustillas (Brighton: Harvester, 1974) を使用した。

1　1895年を境に三巻本の出版数は激減した。1894年には184作品が三巻本だったが，1895年には52作品，1896年には25作品だった。Peter Keating, *The Haunted Study: A Social History of the English Novel 1875–1914* (London: Secker, 1989) 26–27.

2　フィッシャー・アンウィンからシリーズに入れる作品を依頼されたときに，

ギッシングは即座にこの物語を書こうと決めて快諾した。(1895 年 1 月 12 日の手紙, *Letters* 5: 279)

3 H. G. Wells, *Experiment in Autobiography* (London: Gollancz, 1934) 483.

4 George Gissing, *By the Ionian Sea* (Evanston, IL: Marlboro, 1996) 5.

5 George Gissing, *Born in Exile* (London: Dent, 1993).

6 George Gissing, *In the Year of Jubilee* (London: Dent, 1993).

7 George Gissing, *The Whirlpool* (London: Dent, 1997).

8 George Gissing, *The Crown of Life* (Brighton: Harvester, 1978).

9 George Gissing, *Sleeping Fires* (Brighton: Harvester, 1974).

10 1963 年 9 月に初めてオマール・ハイヤームの「ルバイヤート」を読んで感激したラスキンは "Translator of Omar Khayyám" 宛ての手紙を書いた。匿名の訳者が誰なのか, まだ知られていなかったので, その手紙はエドワード・バーン＝ジョーンズ (Edward Burne-Jones, 1833–98) に託されていたが, やっと 1873 年にフィッツジェラルドの手に渡っている。

11 オマール・ハイヤーム・クラブの成り立ちや会員については, Edward Clodd, ed., *The Book of the Omar Khayyám Club 1892–1910* (Private Circulation, 1910) や, Moncure Conway, "The *Omar Khayyám* Cult in England," *Nation* 57.1478 (1893): 304–05 などを参照。

12 Norman Page, "Larger Hopes and New Hedonism: Tennyson and FitzGerald," *Tennyson: Seven Essays*, ed. Philip Collins (New York: St. Martin's, 1992) 152.

13 1859 年の初版の序文によれば "Khayyám" というペルシャ語は「天幕張り」という意味なので, オマール・ハイヤームは "Tentmaker" としても知られていた。Edward FitzGerald, Introduction to the 1859 edition, *The Rubáiyat of Omar Khayyám: A Critical Edition*, ed. Christopher Decker (Charlottesville: UP of Virginia, 1997) 9.

14 Charles Eliot Norton, "Nicholas Quatrains de Kheyam," *North American Review* 109 (1869): 565.

15 例えば 1890 年 12 月 15 日の日記 (*Diary*, 232) を参照。

16 Edward Clodd, *Memories* (London: Chapman, 1916) 167. クロッドは 1898 年と書いているが, これは間違いである。ギッシングがオルドバラ (Aldeburgh) のクロッド邸を訪れたのは 1895 年だった。

17 例えば, 第 29 連と比較するとよい。Into this Universe, and *why* not knowing, / Nor *where*, like Water willy-nilly flowing: / And out of it, as Wind along the Waste, / I know not whither, willy-nilly blowing.

18 "Daily Chronicle Office," *Daily Chronicle* (15 July 1895): 7.

(小宮彩加)